ドストエフスキー・ノート(3)
――日本ロシア文学会講演「宣教師ニコライ、出会った人たち」――

中村　健之介

「ドストエフスキー・ノート(2)」の「ドストエフスキーとイギリス」は、「日本ヴィクトリア朝文化研究学会」創立記念講演（二〇〇一年十一月十七日　大手前大学）のノートである。

今回は、十月「日本ロシア文学会」で行なった講演（二〇〇五年十月七日　早稲田大学）を文字に起し、それに補足加筆してみた。今回の講演もおよその筋書きは用意していったのだが、いざ話し始めるとその場で思い浮かんでくることがいろいろあって、予定していたのとはかなり違ったかたちの話になってしまった。しかしそれでよかったと思う。

講師は千葉大学の御子柴（みこしば）道夫氏と私の二人で、私の前に御子柴氏が「ソロヴィヨーフからロシア正教思想へ」と題して自分の研究の道すじについて話された。

私は「宣教師ニコライ、出会った人たち」という話をした。「宣教師ニコライ」とは、東京神田のニコライ堂（東京復活大聖堂）でその名が知られるロシア正教会の宣教師、幕末から明治末まで半世紀にわたって日本人にロシア正教を伝えるべく奮闘した大主教ニコライ（俗姓カサートキン　一八三六～一九一二）のことである。ニコライは、一九七〇年ロシア正教会によって列聖された。

今日ニコライは、ギリシャをはじめとする東方正教の諸教会でも、また欧米のロシア正教会（The Russian Orthodox Church outside Russia）でも、「日本のニコライ」として広くその名が知られている。二〇〇三年には、北米サンフランシスコのDivine Ascent Pressから*St.Nikolai Kasatkin and the Orthodox Mission in Japan. A Collection of Writings by an International Group of Scholars about St.Nikolai and his Disciples, and the Mission*が刊行された。

1．就寝（ねむり）の聖像

御子柴さんと打ち合わせもしないまま壇に上がることになり、

二人で「話がつながるか心配だね」と言っていたのですが、いまお話を伺っていて、リンクがあることがわかり、ほっとしています。

御子柴さんは、札幌正教会の有原次良神父さまにお会いになったことを話されました。「秘仏のようなものだと思いますが」と御子柴さんはおっしゃいましたが、有原神父さまが、「死んだ」キリストの大きなイコンを見せてくださったときのことを話されました。

私の話はここにつながります。

私は長く北海道大学におりましたので、私と妻は札幌で、キリル有原次良神父（後、主教になられました）、そして義父の厨川勇神父さま（元函館正教会司祭）と長い年月にわたって親しい往き来がございました。なつかしい思い出がたくさんございます。

御子柴さんが札幌正教会でご覧になったイコンは、「就寝の聖像」と申します。ロシア語では「プラシチャーニツァ plashchanitsa」。縦一五〇センチくらいもある、かなり大きな、キャンバスに描かれた、山下りんの油絵です。十字架から降ろされ、墓に入れられたキリスト、「ねむっている」、つまり死んだキリストの全身像です。胸幅のある、たくましい壮年の男性の生々しい肉体を感じさせる絵です。山下りんが描いた「就寝の聖像」は、日本各地の教会にたしか四点ほどあると聞いています。それらのイコンのことは、東京国際大学の大築勇喜嗣さんが詳しく調べて論文に書いておられます。

山下りんのそれらの「就寝の聖像」は、みんな同じ絵です。寸法もあまり違いはないとのことです。その事実一つをとってもわかりますが、山下りんという人は、聖画を模写する「聖像画師」を仕事として生きた人なのです。

複製技術が発達したからアウラが失われたとベンヤミンは言いますが、世界の世俗化が徹底したために、アウラを感じる気持ちが人間からなくなってきたのです。しかし正教会は、プロテスタントはもちろんカトリックと比べてさえも、礼拝芸術が強くずっと生き続けている世界です。イコン制作という模写技術は、いまだに礼拝芸術の内にあります。信者にとってこの模写はアウラを失わないし、もちろんイコン画師は聖なる存在を写しているのであり、模写を仕事としていたからといっておとしめられなぞしません。イコンが制作者無記名であるのは、そういう積極的なことを意味しているのです。画家をめざした山下りんはそこへ、「聖像画師」という仕事へ、段々と落ち着いていったのです。

復活祭の直前、聖大金曜日にこの大きな「就寝の聖像」が至聖所からうやうやしく運び出されて、教会の中央の、柩を置く祭壇に安置されます。そして信徒たちはその聖像に礼拝するのです。そしてこれを持って聖堂のまわりをめぐる「十字行」を行ないます。ニコライの日記には毎年四月に、ことしの十字行は風がなくて「就寝の聖像」が運びやすかったという風に、そ

の晩の行事の記事が出てまいります。

そしてその「就寝の聖像」が、復活大祭の真夜中の祈祷のときに至聖所へもどされ、代わって復活のキリストの大きなイコンが闇の中から現れるのです。

2. モスクワの復活祭

復活のキリストのイコンでは、鮮やかな思い出があります。一九九〇年四月（十四日）の夜、私は妻とモスクワのクズネツキー通りの聖ニコライ教会の復活祭に参祷したのですが、それはペレストロイカ期で、もうソ連無神論体制の箍（たが）はすっかりゆるんでしまっており、宗教がよみがえりつつある気配が、街でもまた知人のロシア人の間でも、はっきり感じられました。聖ニコライ教会の聖堂の内も外の庭もロシア人の老女たちで一杯でした。みんな大きな声で聖歌を歌っていました。歌はたしか「パスハのトロパリ」でした。

そして夜中の正十二時、イコノスタスの王門が開いて、大きな、等身大のキリストが勢いよく飛び出してきました。神学生であったか輔祭であったか、若い男性がその大きなキャンバスを両手でかかげて走り出てきたのです。そこに描かれていたのも、輝く白い衣のキリストで、これまた様式化された硬い図像ではなく、生々しい肉体をもつ男性なのです。ここでぱっと聖堂が明るくなるのです。それをかかげて走り出てきた青年も白い祭服でした。

ドストエフスキーが「キリスト」というといつも、白く輝くイメージで思い浮かべるのももっともなことなのです。『未成年』のアルカージーが鮮やかに思い出す六歳のときに見た聖堂の鳩のように、白く輝くキリストも、きっと幼いときのドストエフスキーの脳に灼きついた、そのイメージなのでしょう。

ロシア正教会の聖堂で、そういう大きなパネルを使って、いわば「キリスト復活劇」を行なっているのです。信仰なき者たちにとっては、ロシア正教会の聖堂はオペラ劇場のような感じさえしますが、復活祭にはそういうパネルを使った演出もなされているのです。

「死んだキリスト」の絵から、「復活のキリスト」の絵へと変わる。それは精妙な象徴劇などではありません。生々しい肉体の死とよみがえりをわかりやすく示そうとする、パネルの入れ替えによる、稚拙な感じさえする劇なのです。ここには、象徴とは反対の、復活は物質的事実だという考えがあります。ロシアの教会はどこでもそうしているのだということを、後になって知りました。復活は文字通りの肉体の死から生への転換としてイメージされ、わかりやすい大きな絵を使って事実として提出されているのです。アドルノの言う「ネオロマンチシズム」とは違うのです。だからドストエフスキーは、ホルバインの、すっかり死体と化してしまって復活しそうにない、あの「死せるキリスト」の絵を見て、ショックを受けたのでしょう。

3. ソ連の知識人と教会

話し出すといろいろなことを思い出します。モスクワのその復活祭には、私たちは、教会に関心を持っていた友人の長浜俊介（三井物産モスクワ支店長）と行ったのですが、きょう司会をしてくださっている早稲田大学の伊東一郎さんやソ連科学アカデミー・東洋学研究所の日本研究者リヂヤ・グロムコフスカヤさんも一緒でした。グロムコフスカヤさんは当時五十歳くらいだったでしょう、「生れてはじめて教会にきました」と言われた、あのときのことばが忘れられません。ソ連社会の階段を昇って地位を得るには、少年少女のころからピオニェールやコムソモールをしなければならない。共産党の模範少年、模範少女でなければならない。そういう人は、それまで教会には近づけなかったのです。

そういえば、最初のソ連留学のときの私のホストだったモスクワの世界文学研究所のワヂム・コージノフも、自分たちは若いとき教会に近づくのがこわかった、近づかなかった、と言っておりました。

しかし、次のような事実もあります。いま東京のニコライ堂におられるロシア人司祭ニコライ・ドミートリエフ神父さまは、ソ連時代にお父さんがモスクワで司祭をしておられた、そういうめずらしい家で育った方です。ソ連時代も教会は細々ながら生きていたのです。

そのニコライ神父は著書『ロシア人・日本人』（山崎瞳訳）に、次のように書いておられます。

「共産党員が教会で子どもに洗礼を授けると党から除名され、職を奪われるのが普通だった。しかし、ロシア人の伝統として共産党員はほとんど全員が子どもに洗礼を授けていた。方法は二つあった。教会へ行くのは親ではなく、おばあさんが孫を教会に連れて行く。もう一つは、親が長期間休暇中に、どこか知り合いに行き会わないような遠方の村に行き、そこの教会で、こっそりと子どもに洗礼を授ける。‥‥ブレジュネフ時代になると、公式には禁じられていることも、個々のケースでは多くのことに目がつむられるようになっていた。‥‥しかし、一般的にはソビェト社会で要職についているような人たちは出世の差し障りになることを恐れて、教会とはできるだけ距離を置くよう気をつかっていた」

4. 最後の審判の絵

もう一つ頭に浮かんできたことがあります。「最後の審判」の絵です。

聖堂内の西の壁に大きく「最後の審判」を描くのは、東方正教会全体にあることではなく、ロシア正教会独自の発明だそうですが、その最高の実物を去年、つまり二〇〇四年、九月六日、モスクワのクレムリンのウスペンスキー大聖堂で見てまいりま

した。ご存じのようにウスペンスキー大聖堂は、帝政時代、戴冠式が行われていた、ロシアで最も格式の高い、壮麗かつ荘厳なる総主教座聖堂です。

この日、『ニコライの日記』のロシア語版全五巻が、日本財団の笹川理事長からロシア正教会総主教アレクシイ二世に献呈されたのです。青木大使はじめモスクワの日本大使館の人たちや日露貿易関係の方々も大勢見えていました。ベスランの悲劇的な事件の後だったので、大聖堂は信徒で一杯でした。後で聞くと三〇〇〇人以上の参拝者がいたとのことです。

献呈式の模様はこの講演の始まる前にビデオでおよそのところをご覧に入れましたが、その献呈式のときに、私はウスペンスキー大聖堂の「最後の審判」をよく見ることができました。高く座したキリストの下に、悪魔の竜でしょう、巨大なへびが描かれているのです。リアリズムとは違った不思議な超現実的迫力があって、実際こわい感じがしました。

五年前、ミレニアムの年に、私は「ミレニアム」について講演したことがあります（「ミレニアムとこの世の終わり――『ヨハネ黙示録』の波紋」二〇〇〇年九月三十日　大妻女子大学公開講座）。十二世紀のフィオーレのヨアキム、現代のジャマイカのラスタファリアン（レゲエのボブ・マーリーをご存じでしょう。エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ崇拝です。ラス・タファリはハイレ・セラシエの幼名です）、映画監督のタルコフスキーなど、『黙示録』が引き起こした古今東西の波紋をいくつか拾って紹介したのです。その波紋は、ドストエフスキーの『白痴』や『悪鬼ども』にも広がっています。

その「ミレニアム」の講演の準備をしていたとき、『黙示録』を題材とした中世の絵の写真をいろいろ見ました。新約聖書でイラストレーションが一番豊かなのは、『ヨハネ黙示録』ではないでしょうか。

モスクワのウスペンスキー大聖堂の「最後の審判」を見たとき、中世ヨーロッパの『黙示録』の版画が、聖堂の広い壁一面に拡大されているような感じを受けました。美術作品を鑑賞するような気持ちには全然なりませんでした。すごみがありました。ロシアの人たちは、小さいときから教会に来る度に、ああいう、この世の終わりの審判の場面を見ていたのです。これならまちがいなく頭に焼きつけられるだろうなと、本当にそう思いました。

5. ベルヂャーエフ

今回の私たちの講演のもう一つのリンクですが、御子柴さんはベルヂャーエフとセルゲイ・ブルガーコフの名前をあげられました。ご存じのように、かれらは二十世紀の初め、ロシアで反マルクス主義の立場に立ち、ロシア革命後はヨーロッパへ追われ、パリの正教神学大学などで活躍した人たちです。ロシア正教を擁護する知識人、あるいは知識人である聖職者です。

『道標（Vekhi）』グループとも言われます。ドストエフスキー研究の面で言うと、ベルヂャーエフは、ヴラヂーミル・ソロヴィヨーフに次いで、ドストエフスキーをロシア正教精神の予言者として高く担ぎ上げた人です。ベルヂャーエフの『ドストエフスキーの世界観』は日本でも熱心に読まれました。

十九世紀のロシアの知識人は、ゴーゴリのような人は例外で、全体として言えばロシア正教会に共鳴した人は少なかった。スラヴ派だって根は別です。もちろん冠婚葬祭はロシア正教会でしてもらっていましたが、かれらは教会から真実の声を聞いているとは思っていなかった。それが二十世紀になって、ロシア正教という、国の制度でもあった宗教を、観念的に純粋化して肯定的に評価する知識人たちが出てきたのです。それがベルヂャーエフやセルゲイ・ブルガーコフのような人たちです。かれらは、それまで近代的な知的精神活動とは縁遠いところにあったロシア正教のために、新たな「正教の哲学」を創造したのです。

6. アントニイ・フラポヴィツキー

ベルヂャーエフ、ブルガーコフの名前が出てきたので、私は府主教アントニイ（俗姓フラポヴィツキー）のことを思い浮かべました。フラポヴィツキーは十六歳のとき、一時帰国していた「日本のニコライ」に、ペテルブルグで会いました。イサーク大聖堂でのその出会いの場面は、ニコライの一八八〇年の日記に鮮やかに書かれています。その後フラポヴィツキーは、実業高校の生徒だったのに進路を変えてペテルブルグ神学大学に進み、修道士アントニイとなります。もともと宗教に惹かれる資質ではあったようですが、ニコライと出会ったことが聖職者の道へ進むきっかけとなったのは明らかです。後にアントニイは、ニコライとの出会いのこと、ニコライがロシアの神学大学へ送ってきた日本人留学生のこと、ペテルブルグの山下りんのことなどを回想して語っています。

聖職者の世界に入るとアントニイは、ロシア正教会のヒエラルキーを大股に昇ってゆきました。カザン神学大学学長を勤め、一八九七年には三十三歳の若さで主教に叙せられ、一九〇六年には大主教になります。そして、高位聖職者になってからも、ロシアのアントニイは日本のニコライと手紙で連絡をとり、日本の正教会のために支援を続けました。

ロシア正教会の聖職者はほとんどが聖職者の家の出身で、教会の古い体制に従う体質の人たちなのですが、聖職者の家の出ではないアントニイ大主教は、ロシア正教会の改革派でした。ニコライは、アントニイから日本教会への支援を受けており、その人格と能力を認めながらも、正教会の内部批判者であるアントニイには同感できないと、ときどき日記で嘆いています。

しかし帝政末期になると、アントニイの信望は高まります。ロシア正教会の若い聖職者たちは、こぞってアントニイ大主教支持にまわり、アントニイはロシア正教会で第一の指導者と目

されるようになります。ニコライは一九一二年に永眠しましたが、一九一七年、ロシア正教会が二〇〇年ぶりに総主教制を復活させたときの総主教選出では、最終決定はくじびきでティホンが総主教になりましたが、第一次投票ではアントニイが最高点を得ているのです。選挙だけだったら、かれが総主教になっていたのです。キエフの神学大学へ留学した日本人の瀬沼恪三郎も、「アントニイ・フラポヴィツキーはわたしの理想です」などと言っています。アントニイはゆるぎない帝政支持者ではあるのですが、ロシア正教会は新しくならねばならないと考えていました。

そのアントニイ大主教は、一九一九年、革命と内戦のロシアを追われ、翌年ユーゴスラヴィアの、ベオグラードの北西七十キロのカルロフツィにあって、そこに新しい宗務院（シノド）を開設します。これが、ロシア革命で外国へ出た白系ロシア人の正教会の最高統率機関となります。ロシア革命でロシアを出たいわゆる正教徒ディアスポラは、二〇〇万人から三〇〇万人と言われますが、その人たちの信仰を指導したのがアントニイ・フラポヴィツキーなのです。アントニイは知識人でした。かれはドストエフスキー論も書いています。ドストエフスキーの予言がロシアで現実となったという見方です。この、在外ロシア正教会の指導者だったアントニイが、間接的にであれ、パリにいたベルヂャーエフに何らかの刺激と励ましを与えたと思われます。ベルヂャーエフのレーニン批評、反動的な宗務院総監ポベドノースツェフと革命家レーニンは似ているという批評、あれもアントニイから教えられたところがあったのではないかと想像されます。

ベルヂャーエフやセルゲイ・ブルガーコフたちの正教哲学の創造は、そういうロシア正教会の激動の時代の体験という大きな視野の中において考えると、なお一層興味深い現象が見えてくるのではないでしょうか。かれらの哲学は時代と深くかかわった正教哲学の創造なのです。

7. 近代宗教の創造

ベルヂャーエフたちの正教哲学の創造は、日本の「近代仏教」の創造を連想させます。

幕末に来日したニコライは、明治になって起きた廃仏毀釈を実際にその眼で見ました。維新で、神道が日本古来の精神原理として高く掲げられ、廃仏毀釈というすさまじい、仏教伝統の破壊が起きて、仏教はもう先がないような感じになった、とニコライは書いています。

「神道の太鼓は力強くとどろき、銅鑼は高らかに響きわたり、神官は偉ぶった態度であたりを睥睨し・・・仏教は外国の宗教であるからということで、蔑まれ貶められることとなった。その蔑みがまた凄まじい。元来仏教に属していながら長い歳月の間に神道の社にまぎれ込んだ祭具備品は一切これを抛り出せとい

う勅令が下った。…仏教無視の仕方もまた凄まじい」（『ニコライの見た幕末日本』中村健之介訳）。

一三〇年前の日本の廃仏毀釈がどれほどすさまじいものであったかについては、各地にいまも残る廃寺を訪ね歩いている歌人の岡野弘彦氏が書いています。（「廃仏毀釈の跡」『朝日新聞』二〇〇二年五月三十日）

ところが、これもニコライの日記から感じられますが、明治後半になって、仏教は元気をとりもどしてきた。ニコライは姉崎正治と何度か会っているのですが、仏教の新しい学問化、知性化、そういう方向での仏教のリヴァイヴァルを感じています。「いま仏教は活気を帯びてきている」、「ヨーロッパかぶれのリベラリストや無神論者たち」が仏教を生き返らせている、――ニコライは明治三十五年の日記にそう書いています。明治時代があれほど宗教熱の高い時代になったのは、単にキリスト教の布教熱のせいばかりではないのです。

これは、末木文美士（すえきふみひこ）さんが『近代日本と仏教』で書いていることですが、欧化という激しい波の中で、日本人は、個人の確立という近代の要請に応えつつ、かつ個人を超える伝統思想を、欧化ではない自分たちの思想を求めなければならなくなった。そうなったとき、神道はあまりにも弱く、頼りにならなかった。

現代の日本の私たちが神道のアニミズムを日本人の精神的バックグラウンドであるかのようにポジティヴに標榜できるようになったのは、キリスト教優位の後の時代、そして文化人類学の後の時代だからではないでしょうか。明治時代の漱石は神道に向かうことはできませんでした。

そのとき、伝統的な思想でありながら、近代思想に変形してゆけるものとして仏教が立ち上がってきたのです。井上円了たちはそういう、前近代的宗教を近代へ甦らせた新しい仏教哲学、「近代仏教」の創造者たちなのです。

ベルヂャーエフたちの正教哲学の創造は、同じ時代、同じような社会の激変ということも含めて、これと類似した面を持っています。外来と伝統という、ロシアの思想の歴史でくりかえし起きている問題であり、自分たちの前近代を近代に、さらに現代に、変形しようとする努力なのです。ドストエフスキーは、そういうベルヂャーエフたちにとって、またアントニイ・フラポヴィツキーにとっても、よい先達であったと言えるでしょう。

ロシア正教会についての研究は、ロシア人の世界観の研究、ロシアについての社会学的研究、あるいは帝国内のまつろわぬ者たちを教化してロシア帝国臣民にする政治的同化活動（その代表例がイリミンスキーです）の研究など、さまざまな領域があるわけですが、「ロシア思想史」との接触面の研究も含んでいるわけです。

8. セルギイ・ストラゴロツキー

「日本のニコライ」とアントニイ主教（フラポヴィツキー）

の双方と密接な関係があったのが、セルギイ（ストラゴロツキー）です。セルギイはペテルブルグ神学大学でアントニイの学生だった人で、アントニイからよく日本のニコライのことを聞いていたようです。そのセルギイが、アントニイに勧められてでしょう、その後、はるばる日本に来てニコライのもとで宣教活動に従事したのです。一八九〇年と一八九七年に、二度も来日しました。

このセルギイがロシアへもどって、やがてスターリン時代のロシア正教会を率いるモスクワ府主教となり、ついには総主教となったのです。

ニコライは日記に、来日したセルギイ・ストラゴロツキーのことを何度も書いていますが、セルギイの性格についてのニコライの洞察は、その後の、ソ連でのセルギイ・ストラゴロツキーの行動を予見しているようなところがあります。

アントニイもセルギイも「日本のニコライ」に連なる者たちでした。しかしこの二人はやがて対立し、それぞれが、二十世紀前半の、ロシアの外のロシア正教徒と、ロシアの内のロシア正教徒を束ねる最高指導者となったのです。

アントニイ・フラポヴィツキーとセルギイ・ストラゴロツキーについては、別の講演「ニコライの周辺」でも話したことがあります。（「日露関係史料をめぐる国際集会」二〇〇五年三月十日東大史料編纂所）

9．現代ロシア知識人とロシア正教

ロシアの知識人たちの創造する新しいロシア正教哲学は、ロシア正教会の儀礼や神秘感覚の伝統と合うか合わないか、知識人たちの正教解釈は異端的ではないかという問いが出てくるかもしれません。しかし、どれが純正な正統正教神学かなどという問題は、神学論争であって、議論しても決着がつきません。「正統」だというロシア正教会の伝統にも、第三者から見れば西の考えがいろいろまじっているのです。ロシアの終末論にしても、ヤーコブ・ベーメが源だと言う人もいます。ドストエフスキーが持ち上げたロシア正教も、実はかれの「新しいキリスト教」であって、フランスからきた博愛主義の観念とかれ自身の神秘感覚のミックスのところがあります。ネオプラトニズムの焼き直しみたいなところもあります。

そういう、いろいろ絡まり合っていることを、少しでもときほぐして、ロシアの知識人の考え方の特徴を明らかにしてゆく、それが、私たち、ロシアの文学、文化を研究する者たちの仕事ではないでしょうか。

また、ロシアの宗教について学ぶとき、「聖人について書かれたものは読んでもつまらない」という一般的な感想はたしかにあります。ロシアの聖人の伝記なども、日本正教会の『諸聖略伝』を読んでも、奇跡の話がパタン化されていて、信心深い人たち向けの「おはなし」になっていて、インテリにはおもし

ろくないのももっともでしょう。アメリカのロシア研究者ビリントンは、名著『イコンと斧』で、ロシア正教会はビザンツ教会の哲学的思弁を置き去りにしたと言っていますが、そうなのかもしれません。ロシア正教会で尊ばれている東方正教会の教父たちについて言えば、たとえばヨハネス・クリュソストモス（黄金の口のヨハネ）やエフレム・シーリン（シリアのエフレム）の著作が日本語に翻訳されていますが、これを読むと、ヴィジョンはすごいと思います。しかし、要するにキリスト教の世界の讃美と精神的修養のことばのようにしか聞こえず、やはりもの足りなく感じてきます。

聖人伝というのは、言い方はきついかもしれませんが、どこを切っても同じ顕彰讃美になっています。しかし、信仰においてはそこがありがたい、大事なことなのだろうと思います。聖人とはアウラを感じる信徒の方たちがあがめる特権的存在、カリスマなのです。ロシアの聖人崇拝の土壌からレーニン、スターリン崇拝が生まれるのは、不思議なことではありません。

アウラを発するのが聖人だと申しましたが、その聖人は、あるいは信仰は、病人を治す力を持っていることが大きな威力となっているようです。これはロシアの聖人伝でもニコライの日記でもはっきり感じられることです。（治癒力をもつ聖職者については「ドストエフスキー・ノート(1)」に書いた。）

それと対比すると、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』のゾシマが聖人の近代化であることがよくわかります。ゾシマには神秘主義の衣はかけられていません。だからゾシマは日本の読者をも惹きつけたのかもしれません。東方正教会の聖人たちと十九世紀のドストエフスキーの考えを結びつけて、作家ドストエフスキーの思想の根は東方正教会の聖人たちにあるという構図の「証明」を試みる研究者が多いのですが、そういう証明よりは、実は切れているものをつながっているように見せているところに現れている、ドストエフスキーの複雑な世界観や人間観に目を向ける必要があるのではないでしょうか。

よく知られていることですが、たとえば矢内原忠雄や野間宏や寺田透などの日本の知識人は、日蓮や親鸞や道元に立ち帰って分析と思索を続けてきました。空海にまでさかのぼる人もいます。そういう知識人はたくさんいます。いや、日本では高校生までが『歎異抄』を読んで考えたりします。そういう人たちの日蓮や親鸞や道元やらの解釈の試みは、それぞれの個がその時代の中で、いま発している自分の問いであり、その答えの探索です。現在の自分から、過去の宗教人に向かって繰り返し問いかけているのです。宗門の人たちから見ればそれは時にはトンチンカンだったり、非宗教的だったりするかもしれません。しかし、そういう世俗の人たちの思索や研究は、逆に宗門の人たちにとっても、益をもたらすと思います。

日本の知識人のように、現代ロシアの知識人も、これから、ロシア正教会のすぐれた宗教人に向かうのでしょうか。すぐ素直に帰るわけにはいかないにしても、そういう、知識人の伝統

宗教への問いかけという伝統回帰が、これからロシアでも起きてくるのでしょうか。カリスマであるロシアの聖人たちに対して、いわゆる「ヴェールユシチー verujushchie〔信者〕」だけではなく、ロシアの知識人たちが自分たちの現在から問いを発し、思索し、やがて自分たちなりの解釈を生み出してゆくのかどうか。ソ連時代という七十年間の強引で不自然な社会体制による世俗化を経て、ロシアの知識人は宗教にどう対してゆくのか。現代ロシアの知識人は、ソ連時代に抹殺された過去のロシアの事実を、自分たちの歴史を、取りもどそうと懸命ですが、ベルヂャーエフたちが試みたように、現代の自分たちと伝統宗教との間に、知的な橋を架ける動きが今後広がってくるのか。そこが日本のロシア研究者として非常に興味のあるところです。

知的な橋を架ける――それは無理の多い作業でしょう。もちろん日本の仏教の場合も無理があったのです。前近代を現代に再生させようということ自体が無理なのです。

しかし、個々の知識人のそういう橋を架けようとする懸命な試みによって、過去の思想、文化が生き延び、過去と現在と未来のつながりが保たれるのではないでしょうか。

10. ドストエフスキーのニコライ訪問

さて、ようやく、用意してきた話にたどりつきました。用意したのは「ニコライ、出会った人たち」です。枝葉は脇に置いて、今回はニコライの日記から、ニコライを訪ねてきた二人のロシアの知識人についての記事を紹介します。一人は作家のドストエフスキー、もう一人は哲学者のヴラヂーミル・ソロヴィヨーフです。

さきほどアントニイ・フラポヴィツキーについて申しましたように、一八七九年から一八八〇年、ニコライは、東京に大聖堂（正式名称は東京復活大聖堂。一般にはニコライ堂）を建設する資金を集めるためにロシアへ一時帰国いたしました。その帰国時の一八八〇年、かれがモスクワの修道院の分院に滞在していたときのことですが、ロシア暦の六月一日（新暦六月十三日）に、ドストエフスキーがニコライを訪ねてきました。ニコライはロシア正教の異邦伝道者としてロシアで有名になっていて、ときどき「いまニコライ師はモスクワのどこどこの教会に来ておられる」といった記事が新聞に出ていたのです。

その日の日記にニコライは次のように書いています。お配りしましたプリントの①をごらんください。「もどると、有名な作家フョードル・ドストエフスキーが来ていて、会った」という個所です。

ドストエフスキーは日本人について「あれは黄色人種ですからね。キリスト教を受け入れるにあたって何か特別なことはありませんか」などとニコライに訊いています。このドストエフスキーが言ったことについては、私は以前、解釈めいたことをすでに書きましたので、きょうは別の点に光を当てます。

この十行ほどのニコライの日記の記事を読んで感じるのは、『カラマーゾフの兄弟』を書いた有名な作家ドストエフスキーと会った感想にしては、まことにそっけない感想だということです。「やわらかみのない、よくあるタイプの顔。目がなにか熱っぽくかがやいている。かすれた声。咳をする。肺病のようだ」などというあたりに特に感じられますが、ニコライの目は冷やかな観察眼だということです。いま、この冷やかさの背景を考えてみたいと思います。

11. プーシキンの銅像の成聖に反対する正教徒たち

ドストエフスキーがニコライを訪ねたこのとき、モスクワでは、六月五日から「プーシキン記念祭」が開催されることになっておりました。これは文学者を含む知識人たちとジャーナリズムと政府と教会上層部が一緒になって開催した、いわば国をあげての一大祭典だったのです。地方からたくさんの知名人、知識人がモスクワへやってきました。モスクワ市長トレチャコフも、大いにこの「プーシキン祭」を支援していました。

六日の正午には、モスクワの中心トヴェルスカヤ広場で、オペクーシン作のプーシキンの銅像の除幕式が行なわれて、十万もの人が集まります。除幕式の少し前には、広場に近いストラスノイ女子修道院でプーシキンに捧げる追悼儀式（パニヒダ）が執り行なわれます。それを執り行なったのはロシア正教会の最高指導者の一人、モスクワ府主教マカリイです。ドストエフスキーもその盛大なパニヒダに参侍しています。

そのプーシキンの銅像の除幕式ですが、パニヒダを府主教マカリイが執り行なっていることからも想像がつきますが、ロシア正教会がプーシキンの銅像を「成聖」、カトリックで言えば「聖別」、するのです。プーシキン像を神聖なものとする、プーシキンをあがめるべき尊い人として教会が認めるということです。

そのことについて、プーシキンの銅像の成聖式の二日前、六月四日のニコライの日記に、興味深い記事が見られます。プリントの、先ほどの①の次の「背景」というところをごらんください。

モスクワのまじめな正教信徒たちやまじめな修道女たちが、教会によるプーシキン像成聖に反対しているのです。ニコライの日記を読んでみます。

「ストラスノイ尼僧院のエヴゲニヤ尼がアレキセイ座下のところに来た帰りに立ち寄り、プーシキン像の成聖を行なうために像に向かって宗教的な行列をくりひろげることに対して民衆が不満を言っている、という話をした。同じことをイオイリ師も言っていた。イオイリ師と一緒になんとかいう請負人が来たが、その男はプーシキン像の成聖に腹を立てていて、『フィラレート（前モスクワ府主教）は、あそこの凱旋門を成聖したりはしなかった』と言った。

なんと深い意味のある反応であることか。これは、民衆の宗教的感情の爆発であり、聖職者が印刷されたプログラムに従って出てきて成聖その他を行なうことに対する憤りなのだ！　府主教に対し変更が求められている。これがモスクワなのだ！　ここの敬神の念は非常につよい。教会が自らを貶めることになりかねないあらゆることに対して、民衆は実に敏感に反応する。しかも事態は笑っていられない段階になっている。すでにモスクワ総督と警察本部長は、聖職者の行列に反発して民衆が騒ぎ出していることを伝えるため、府主教を訪ねた。民衆は『連中はおれたちに偶像崇拝を教えようとしているんだ！　連中は偶像を成聖しようというんだ』とか、『教会はあんなもの（プーシキンのこと）のために祈祷をしてはならない。あれは自殺した人間だ。あれは、あんまり軽はずみなために殺されたやつじゃないか』と言っているという。（ルージンがアレキセイ座下にそう言った。）『あいつにダイヤモンドの冠をかぶせるのはいいさ。だが、偶像を成聖するのはやめさせろ。それでなくても、いまだって不信心な者たちのいい笑いぐさなんだ。プーシキンまでが奇跡を行なうことになりますぜ。なにせ、プーシキンを、聖人の遺骨と同じに成聖するというんだから』（請負人が言ったこと）。『うちの主教さんたちはいったいどうなってるの！』（ストラスノイ尼僧院の教会でそう言っていた）。

これで国民的詩人だというのだ。一般の人たちがなんと強い道徳的性格をもっていることか！」（ニコライ日記　一八八〇年六月四日　モスクワ）

修道女たちだけでなく教会上層部にも、この民衆の正教徒たちの気持ちに共感する聖職者たちがいたようです。ニコライの日記の六月十一日には、ヴャトカの主教アポロスが「教会としてプーシキンに敬意を表明することに激しく反対していた」ことが書かれています。（ニコライ日記　一八八〇六月十一日　カザン）

プーシキンの銅像成聖に反対を唱えるモスクワの正教徒や修道女たちに、ニコライは明らかに共感しています。ニコライの内にも、同じような気持があったということです。そういう熱い共感と、六月一日に訪ねてきた作家ドストエフスキーを見るニコライの目の冷やかさは、一体をなしているのです。ニコライはロシアの知識人一般の信仰に対して、一貫してつよい不信感を抱いていますが、それもこの冷やかさを生み出しているのでしょう。

12．国民詩人プーシキンはいかにして作られたかという問題

このモスクワのまじめな正教徒たちの、プーシキン像成聖に対する激しい反発、「連中はおれたちに偶像崇拝を教えようとしているんだ。教会はあんな者のために祈祷してはならない。あれは、あんまりかるはずみだったために殺されたやつじゃないか」という反感は、プーシキンがまだロシア国民全体から尊

敬されてはいなかったのだ、という事実を教えてくれます。ということは、その後の「国民詩人プーシキン」はいかにして作られたのだろうか、という問いが、自然と湧いてきます。ロシアでプーシキンの像が建てられたのは、これが初めてなのです。

プーシキンについてのこの問いで、いま思い出すのは、すぐれたロシア文学研究者ボリス・エイヘンバウムの『レールモントフ』です。この著書でエイヘンバウムは、一八二〇年代のロシアの国語革命において牽引車のは働きをしたのは、マルリンスキー、ダーリ、ヴェリトマン、センコフスキーといった、今日では二流とされている作家たちであって、今日ロシア文学全体の父と讃えられているプーシキンではなかったのだ、ということを立証しています。

では、どうしてプーシキンはロシア文学の父、国民詩人になったのか。これは大きな問題です。いまここで言えるのは、この一八八〇年代に、これまでロシアの貴族文学者の間で文学者として讃美されていた「天才的詩人プーシキン」が、ロシア国民融和のシンボルとして、社会的、政治的要請から、「国民詩人」に祭り上げられたのだろうということです。そしてその神輿(みこし)をかついだ人たちの中心に、ドストエフスキーもいたのです。

そして、帝政時代にはじまったこのプーシキン偶像化の流れが、ソ連社会主義時代になっても批評されることなく、かえってますます強められて続いていったと言ってよいでしょう。

ニコライが共感した民衆の「偶像を成聖するのはやめさせろ」という声は、どこへ行ったのでしょうか。それは、実は、ソ連の社会主義道徳に吸い込まれていったのだと思います。モスクワっ子たちのプーシキン成聖反対の声は、聖人崇拝そのものの否定ではありません。まじめな聖人崇拝の支持者たちが、衣を更えて、ソ連の英雄主義の形成に参加したのだと思います。ご存じのように、ソ連はなんでも英雄が引っ張る社会でした。

ニコライが感心しているモスクワっ子の「強い道徳的性格」は、ソ連時代になってもしばしば言われたことで、たとえばペレストロイカ期のルンギン監督の映画『タクシー・ブルース』は、それがテーマです。

13. ヴラヂーミル・ソロヴィヨーフ

ニコライがモスクワで会った人物をもう一人紹介します。ドストエフスキーの若い友人、哲学者のヴラヂーミル・ソロヴィヨーフです。

プリントの②の個所をごらんください。ニコライは日記にこう書いています。少し長いのですが読みます。

「サワ分院へもどると、アレキセイ座下のところに哲学者のヴラヂーミル・セルゲーヴィチ・ソロヴィヨーフとパヴロフ教授が来ていた。

ソロヴィヨーフは二人きりで話し合いたいというので、一緒

に階下のわたしの部屋へ来た。かれが、剪髪式を受けて修道士になりたい、そして最初の数年われわれの日本宣教団で暮らしたいのでお願いしたい、その間日本の神学校で教えて宣教団の役に立ちたい、と言ったのにはおどろいた。

かれが聖職者集団の外にいながらでも教会のために著作活動をするのであれば、そのほうが教会にとっても益がより大きいという理由で、修道士になるのはやめたほうがいい、とわたしは率直に忠告した。ソロヴィヨーフは修道士になろうと思うその動機として〈自分の性格の弱さ〉を言った。それならなおのこと、かれは修道士になるべきではない。

とにかくかれはきわめて傑出した、おどろくべき人物だ。見たところも本物の哲学者に見えるし、かなり陰欝な感じだ。かれはまだ二七歳なのだ。ガヴリール・スレテンスキー師が訪ねて来たので、ソロヴィヨーフは急いで話を打ち切った」（一八八〇四月三日　モスクワ）

十九世紀後半のロシアで、正教思想の旗手として最も注目を集めていたドストエフスキーとソロヴィヨーフの二人が、「日本のニコライ」を訪ねたのです。そして、ソロヴィヨーフが修道士になり日本宣教団で働くことを志願したというのです。この事実は、ロシアで最もくわしい、ルキヤーノフのソロヴィヨーフ伝にも載っていない、ソロヴィヨーフ研究者のびっくりするような、世界初のニュースです。

「ソロヴィヨーフは見たところも本物の哲学者に見えるし、かなり陰欝な感じだ」というニコライの感想もおもしろいですね。話したことに劣らず外見も大きな意味を持ちます。

しかし、一番興味を感じるのは、ニコライに会いにきたソロヴィヨーフの性格です。

「ソロヴィヨーフは修道士になろうと思うその動機として〈自分の性格の弱さ〉を言った」という。

当時のロシア人の目には、ニコライは異邦伝道の勇者と見えていました。そしてその性格は実際、健全だし、剛毅なところもあります。性格の弱いソロヴィヨーフは、自分の中の或る気持ちを聞いてもらいたくて、ニコライを訪ねたのだと想像されます。ソロヴィヨーフは、最初から実際に日本へ行く気はなかったのではないかと思います。ただ、自分の気持ちをニコライに聞いてもらいたかったのだと思います。その気持ちは微妙なものです。そこには複雑な甘えがあり、いわば自分のための自己弁護があります。

性格が弱いというなら「それならなおのこと、かれは修道士になるべきではない」、とニコライは自分の経験を踏まえてきっぱりと答えています。ニコライは単刀直入にものを言う人です。かれはソロヴィヨーフの内の心理劇はわからなかったでしょう。相手が言ったことをまともに受け止めて、まっすぐ返事をしています。

別の客が来ました。すると、そんな重大な話をするために来たはずのソロヴィヨーフが、そそくさと帰って行きました。こ

の帰り方もソロヴィヨーフ自身をよく表しています。

その一週間後の四月十日、今度はソロヴィヨーフの母親がニコライを訪ねてきます。ロシアで最も有名な歴史家だったセルゲイ・ソロヴィヨーフの奥さんです。

「ソロヴィヨーワ夫人が見えたと下僕が伝えてくれた。歴史家の故セルゲイ・ミハイロヴィチ・ソロヴィヨーフの奥さんだ。彼女は夫の著書『ロシア史』の一セットを菩提樹の樹皮で編んだ篭に入れて持ってきてくれた。夫のことになると少し涙ぐんだ。夫の病気のこと、ロシアにかかわることになるとどんなことでも夫は興奮した、ということなどを話した。『夫は、新聞を読みながらぶるぶる震えることがよくございました』と言った。

息子の哲学者ヴラヂーミル・セルゲーヴィチ・ソロヴィヨーフのこと、かれのこども時代のことも語った。ヴラヂーミルは本当にまじめな子で、いつも馬をきれいに拭いてやってハイドードーとやっていたという（これは木馬のことなのだ）。お母さんの話によれば、日曜の〔ペテルブルグで行われた〕博士論文公開審査の議論は一時から五時までも続いた。反論がものすごくたくさん出た。あるニヒリスト〔反伝統主義者〕などは反論を述べていて怒りのあまり気が動転してしまっていたとのこと。ヴラヂーミル・セルゲーヴィチも疲れきってしまった。しかし公開討論は見事に勝ち抜いたとのこと。かれの姉妹たちもその公開討論会を聞くためにモスクワから出かけて行ったという。

セルゲイ・ミハイロヴィチ・ソロヴィヨーフの遺児は七人いる。息子が三人、娘が四人。

ソロヴィヨーワ夫人はとてもやさしい、賢い人のようだ。帰りぎわ彼女は、わずかな寄付金ですがといって差し出した。一〇〇ルーブリもあった。彼女は、ヴラヂーミル・セルゲーヴィチがペテルブルグからモスクワへもどって来たら、わたしのところへ寄こすと約束した。どうかあの子に絶えず聖餐に与らねばならないということを言い聞かせてやってくださいとわたしに頼んだ」（一八八〇四月十日　モスクワ）

ニコライは田舎育ちで、小さいときから馬に乗っていました。ペテルブルグでも、人を訪ねるときは、宿舎の修道院から馬を出してもらって自分で手綱をとって出かけています。日本での地方教会巡回の旅で山道を行くときも、上手に馬を乗りこなしています。ソロヴィヨーフの母親が「ヴラヂーミルは本当にまじめな子で、いつも馬（木馬）をきれいに拭いてやってハイドードーとやっていました」と言ったという日記の一行は、ニコライとヴラヂーミル・ソロヴィヨーフとの大きな距離を示しています。

ヴラヂーミル・ソロヴィヨーフは生きた馬にさわったことのない都会っ子です。強烈な性格の父親が支配する家庭で勉強一筋で育った青年です。同時代の有名な貴族シェレメーチェフ伯爵の『回想録（メモワール）』にも書かれていますが、ヴラヂ

ーミルの父、歴史家のセルゲイ・ソロヴィヨーフは皇帝アレクサンドル三世とも親しい、激しい愛国心をもった大学者です。息子のヴラヂーミル・ソロヴィヨーフの場合、書物と空想が心の栄養でした。空想は心の九十パーセントを占めていたでしょう。九歳のときにソロヴィヨーフは、「永遠の女性」ソフィヤの輝かしい幻を見ます。それ以後も何度か同じ幻を見て、現実の女性にではなく、その幻の女性に惹かれています。かれは、幻と知識で生きる都会人なのです。ソロヴィヨーフの思想がペテルブルグのインテリ階層に好かれたのは当然です。ロシア正教の思想家などと言われますが、全然民衆のにおいはしません。

私は以前、「ドストエフスキーとソロヴィヨーフ」（『ドストエフスキー・生と死の感覚』所収）という論文でも書いたのですが、レオンチエフがドストエフスキーの正教思想を、「これは正教思想ではない。フランスの博愛主義だ」ときびしく批判したとき、ソロヴィヨーフはドストエフスキー擁護の旗を揚げました。ドストエフスキーの思想は「真にキリスト教的、正教的」だという論文を発表したのです。ところが、ソロヴィヨーフは同時にレオンチエフ宛の私信では、ドストエフスキーは「一度として真に宗教的な地盤に立ったことはない」、ドストエフスキーは「望遠鏡を通して」宗教を眺めていただけだ、と書いているのです。

ソロヴィヨーフは修道士になる気は本当はないのに、ニコライを訪ねて、自分は性格が弱いので修道士になって日本宣教団で働きたいのですと訴えてみる、そういう青年だったのです。かれはそういう、自分の一種の空想の弁解をしないではいられなかったようです。

私はソロヴィヨーフについて考えるとき、その人間を理解するところから出発したいと思っているのです。神学者、哲学者であるより前に、かれがどういう人間であるのかをとらえたい。それがかれの関心あるテーマ、考え方、思想と密接に結びついていないはずがないと思うからです。

そして私は、ドストエフスキーの文学を理解するにも、そういうアプローチが大事だと思っています。

私はこれまで、ドストエフスキーについて、またかれの生きたロシアについて、いろいろ書いてきましたが、それは作家ドストエフスキーという人間を理解したい、そしてかれがどのように人間を理解していたかを知りたいとずっと思っているからなのです。去年出版されました私の『永遠のドストエフスキー・病いという才能』も、そういう観点から書き上げたドストエフスキー論です。